

■ふわとろわたしを召し上がる♪

↙家庭部のえつちな体験入部↙

☆声優さんへのお願ひ

↙一人称←私、二人称←きみ

キャラクター

↙明るく優しい声でお願いします
↙当サークルではヒロインとの人間
関係の形成を重視しております。
トラックを重ねることに
親密度を増していき、最終的には
あまあまなえつちでお願いします。

↙台本は言いやすいように

少しアレンジしていただいて
かまいません。

位置指定のルール

一度つけた位置は以降の「」で同じです。
ただし、便宜のため、
台本ページが変わると
改めてつけています。

★はSEです。

編集tonericさん江

台本化した都合上、セリフは3行程度に
分けています。

ですがキャラが生き生きしている感じを
出したいので、セリフのまとまりを気に
せず、テンポよくつなげてあげてください。
(C P P)

//スタッフ
シナリオ.. 茶渡エイジ
声.. 秋野かえで
イラスト.. 秋民莉緒
ロゴ.. ヲリ
音声編集.. Tonerico
企画・台本化.. 中島駿平
台本化・ディレクション..
企画修正.. CPP
御厨みくり

トラック0 「家庭部に体験入部いかがですか」

★廊下、近寄る音

//背面近くで話します

「あ、あの……すみません」

//背面近くから正面近くに回るように話します

「もしかして間違つてたら、ごめんなさいなんんですけど……。」

「今……そこで『家庭部』の
部員募集のポスターを
見ていましたよね？」

//さらに一步近づき話します。

「や、やつぱり。見てくれたんですね！
もしかして……」

『家庭部』に興味がおありなんですか？」

// やや早口で

「部室の前で立ち止まつて
いる、
ということは 少なくとも、
ほんの一部でも

『家庭部』に興味があるという認識で
よろしいですか？ よろしいですよね？」

//正面近く、一步離れるように話します

「あつ……ごめんなさい。

食い気味に話しかけてしまつて……。」

//正面近く

「安心してください。

不審者ではありません。

だからその、

スマホで通報するのはやめてください」

★数歩離れる音（後ずさりする感じ）

//正面遠くから話します

「ま、待つて 逃げないでください。
たしかに私が逆の立場だつたら
絶対に怪しいんですけど、
ここは大丈夫なので、
逃げないでください」

//正面遠くから近くへ移動しながら話します

「えへへ……袖を掴みました。
もう逃げられないですよ。えへへ……」

//正面近くで話します

「こほん。失礼。

色々あつて舞い上がっているので、
私、少し落ち着きますね。すーはー…」

「あらためまして、私、

繭宮こもりといいます

きみが今見ていた

『家庭部』の関係者です」

//正面近く

「でも、そんなに固くならなくて

大丈夫ですよ

『家庭部』だけにアツトホームな
部活を目指していますから』

「まあまあ

ここで会ったのもご縁ですから。
お話だけでもしていきませんか？」

「ふむふむ、

部活を探して回ってるんですね？」

「運動部を色々回ってみたけど、

これだつていう部活がなかつたから、
今は文化部を回つてると……。」

「たしかにうちつて、少し前まで

女子校だつたから、男子向けの部活で、
しかも運動部つてなると
選択肢はかなり少ないですよね……。」

//正面間近に移動しながら話します

「そういうことですししたら、
ぜひとも『家庭部』に

入部するのはどうでしようか！？
私の直感が、きみに合う部活は
ここだと告げています。」

//腕組み、自慢げに

「ふふ、私の占いは三割当たるつて
部活の中でも評判なんですよ？」

//右耳元に移動しながら小声でささやきます

ます

「料理とか好き?」

ファッショ nに興味はある?

女子部員に囲まれて

あつちこつち振り回される準備はいいですか?」

//耳元から少し離れて

「あ、最後のは聞かなかつた

ふりしてください」

//正面近くへ移動しながら話します
「『家庭部』はお菓子作りと被服制作をメインの活動にしている部活です。」

//正面近く

「日頃の活動はお菓子作りを中心にしていて、
学園祭やイベントに合わせて
被服制作を行うイメージで」

「お菓子作りも、被服制作も、
いきなりハードルが高そうだつて
思うかもしれません、だいじょーぶ」

「最初は見てるだけでいいんです。

クッキーや白玉あんみつを

食べるだけでも、全然いいですよ」

//正面近く

「ね？」

だんだん楽そうな部活だと錯覚……
楽しそうな部活に
思えてきたんじやありませんか？」

「活動自体は運動部みたいに
ハードじやないですし、
勉強の邪魔にならない、
きみにぴったりな部活だということは
保証します」

//正面間近に移動しながら小声でささや
きます

「それに……今なら男子はきみ一人。
可愛い女の子に囲まれ放題……なんて」

//左耳元へ移動しながら小声で囁きます
「それに私も……」

君が入ってくれたら、嬉しいです。」

「慣れるまで不安？」

料理も裁縫もしたことない？

私が、つきつきりできみの

お世話しちゃいますから……♪」

//左耳元から正面近くへ移動しながら話
します

「そ、そうだ！」

今日は体験入部なんていかがでしよう！
我ながら、なんてナイスなアイデア！
善は急げです。早く部室に入りましょう」

トラック1 「こもりの白玉こねこねクツキン
グ♪」

「右側近くで話します

「それでは、

体験入部をはじめていきましょう！」

「今日は部活がない日なので、

簡単なもので……

フルーツ白玉を作る、

というのはどうでしよう？」

「やや早口で

「甘いもの、お好きですか？」

「うんうん。勉強で疲れた頭に、

甘いものはいいですね！」

「じゃあ、決まりですね。」

体験入部は

フルーツ白玉づくりにけつてーい。

（拍手）

「まず、エプロンをつけてください。

部活の備品があるので、

そちらを使ってくださいね。

私も、自前のエプロンが

あるので着替えて、と……」

★エプロン着替える音

「はい、準備完了です。

うんうん、似合つてますよ。

私も、似合いますか？

ありがとうございます。

制服の上からエプロンを着るのって、
好きなんですよね」

//右側近くで話します

「普段着の上から着るよりも、
制服の方が家庭的な感じが
すると思いませんか？」

「……え……ちょっと趣味がマニアック？
そ、そんなことないですよ」

「エプロンつけられました？
あ……もしかして後ろで
ちようちよ結びするの、苦戦してます？」

//すこし小声で話します

「意外と不器用……可愛い……」

//右側近くで話します

「あ、いえいえ。恥ずかしがらなくとも、
ぜんぜん大丈夫ですよ。

緊張してると普段できる」とも
できないときありますし…」

//右側近くで話します

「そんなときこそ、

私を頼ってくださいね！

家庭部の部長として、責任を持つて、
手伝つてあげますね」

「え、そんなに気合いを入れる

場面じゃない？

いいんです。遠慮しないでください。
では、後ろ、失礼しますね……」

//背面近くに移動しながら話します

「これは……失敗して固結びに

なつちゃつてますね。

今ほどきますから、

ちよつと待つてくださいね……」

//腰回りの紐から解きます

//背面で囁きます

「ん……。

固くて、取れない……。

ん…… んん……」

//背面で話します

「はあ……

思つたより、固いですね。

もう少し……んん……

よし ほどけました！」

「はい。腰の後ろは結べましたよ。

あ、まだ動かないでくださいね。

首のうしろにも、

結ぶところがありますから」

//首側の紐を解きます

//背面近くで話します

「ん……。」

「ん~……」

「首すじ、くすぐったいですか？」

「でも、あとちょっとだけ」

「我慢してくださいね」

「ん~……」

「あ、髪に糸くずがついてますね。」

「取つてあげますね」

「//左耳に息を吹きかけます」

「ふ……」

「ふ~……」

「//」から男性(KU100)の右側に立つ

「//」により男性の方を向きながら演技してください

「//」右側近くに移動しながらやや早口で話します

「わざと耳に息をかけて、
いたずらしてないかって？」

「す、するわけないじやないですか。」

「私は部長ですよ？」

「大事な体験入部生のきみに、

「そんなことすると思いますが？」

「ふーつてすると、ビクツとなるのが
面白いなって思つてるだけです」

「//男性の方を向きながら
「さて、白玉づくりの用意ができました。

お湯を沸かしながら、

白玉粉を練つていきましょう」

「甘いのが好きなら、白玉を練るときに
お砂糖をプラスで入れてもいいですけど、
今回はどうしますか？」

//頷く男性

「では、そのようにしましょう。
ほんのり甘い白玉、しあわせの味です」

★小鍋でお湯を沸かす音

「最初に、こちらのお鍋で
お湯を沸かしておきます」

「本当は顧問の先生がいないと
火は使えないんですが、
今日は特別ですよ」

//やや小声で、手を添えて
「誰にも言っちゃいけませんからね。
二人だけの秘密、ですかね……？」

★途中耳たぶの音（？）

//正面を向く・目線下
「ボウルに白玉粉を移して、

水を加えてこね合わせましょう」

//男性を見る

「じゃあ……（男性を見る）

混ぜてもらつてもいいですか？」

//正面を向く・目線下

「最初は粉が飛ばないように慎重に……。

うんうん、いい感じです♪」

「混ざつてきたら、耳たぶくらいの柔らかさにこねてくださいね」

//男性を見る

「え、手が離せないから、耳たぶの硬さが分からない？」

ええと……

このくらいですよ」

//男性の耳たぶを揉む

「ほらほら。

分かります？

あ……私がきみの耳たぶを揉んでたらいけませんね！
なんでやねーん……」

//男性を見る

「あ、あれ。面白くありませんでした？」

女子部員の間だと、

けつこう笑いが起きるんですが……」

「わっ、耳が真っ赤になつてますよ。

大丈夫ですか？」

強くつまんでしましたか？」

「ごめんなさい……。

その……きみが接しやすいから、
調子に乗つてしましました……」

「え……結局、

耳たぶの硬さが分からないまま？

それじや……

わ……私の耳でよければ、
触つてみます？」

「い、いいですよ。

ど、どうぞお好きに……」

「な、なんちやつて……。

あつ、

お、お湯が湧きましたね」

「では、

白玉を丸めてお鍋に入れていきましょう。

投入する時はお湯跳ねに
気をつけてくださいね。」

//正面を向く・目線下

「♪♪ASMR♪ポイント

「♪♪ね♪♪ね……」

「♪♪ねこね……」

「あ……急に静かになっちゃいましたね。

(男性を見る)

「ねてる時って、集中しちゃいますよね」

//男性を見る

「そういえば、体験入部の話ですけど、
他に気になった部活は
あつたんですか……？」

//正面を向く・目線下

「ふむふむ……」

最初に運動部を回ってみて、
今は文化部を回ってるんですね。
たしかに七森学園って、
少し前まで女子校でしたからね」

「男子の部活の選択肢は

かなり少ないと思います。
せつかく共学になつたのに、
そういうところは
ちよつとかわいそうですね」

//男性を見る

「え？ そんなに残念じやないですか？
そうなんですね。
きみがこの学園に入つたのは、
将来やりたいことを
勉強できるからなんですね」

「//男性を見る

「す……すごいです！

そんな風に言えるの、

尊敬しちゃうな……」

「//正面を向く・目線下

「私、自分のやりたいことに
まっすぐな人を応援するの、
好きなんです。

だから家庭部の部長も
やつてるんですけど……」

「//男性を見る

「あ……ということは、
特に入りたい部活も
ないということですね？
ですよね？」

「……ふむふむ。

何でもいいわけじやなくて、
入るからにはきちんと選びたい……と

「ふふ……。

あ、急に笑つてごめんなさい。
きみつて、もしかしなくても、
とつても真面目つて言われませんか？」

「まっすぐ真面目なのつて、

恥ずかしくなんてないですよ。

それつて、すごく素敵だと思うし……。

……あ、あはは。

いきなり何を言つてるんですかね、私」

//正面を向く・目線下

「あ、（向く）

白玉が浮かんできましたね。

おたまですくって、

冷水に取つてください。

白玉の残りがなくなるまで
繰り返していきます」

★お玉ですくう水音

//男性を見る

「並行して、フルーツを準備します。

今回は、缶詰のフルーツを使いますので、
フタを開けるだけです」

「では、この重要な役目をお願いするのは…」

//ボ○モンのサ○シ風で

「（溜めてから）

…きみに決めた！」

//お湯が沸く音が静かに聞こえる沈黙

「う……。

か、缶切りです、どうぞ。
今のは、気にしないでくれて
いいですのです……」

「え……」

缶切り使うの、初めてなんですか?
まあ、おめでとうございます。
体験入部っぽくなつてきましたね。
初めてのことに
どんどん挑戦していきましょう！」

「//男性を見ながら
では……。」

最初だけ私がやるので、
あとは真似してみてください」

「開ける時は、中身のシロツップを
こぼさないようにしてくださいね
白玉に入れるシロツップとして使います」

「あと、缶詰のふちで指を切らないように
気をつけてくださいね」

★缶を切る音

//正面を向く・目線下

「そうそう、いいですよ。

やつぱり男の子は力がありますね
はやーい、もう全部切れそうです」

「あつ、さい」の一部は切らずに
残しておいて……つて、
ああつ(慌てる)」

//缶のフタで指を切つてしまふ男性

//男性の方を向く

「だ……大丈夫ですか？」

大変、指から血が……」

//「大丈夫」と話す男性

「いえ、それは大したことなくないです
唾つけておいても治りませんよ。
そんなの信じちゃダメです」

★水の音

//正面をむく・目線下

「まずは傷口を流水で洗い流して……
絆創膏を貼りますね」

//生徒手帳から絆創膏を取り出す

//男性の方を向く

「これですか？」

家庭部の部長として

いつも手帳に入れてるんです」

「意外と役に立つんですね。」

「こういうときがあるので」

「ただ……可愛い花柄なので、

男の子がつけるのはちょっと
恥ずかしいかもせんが」

//絆創膏をまく

「はい、巻けましたよ。

家に帰るまではつけててくださいね。

それと……」

//頭を下げる

「私が無茶言つて、缶切りを使わせて
しまつたせいで怪我させちゃつて、
ごめんなさい。

//頭を上げる

「もう一度、怪我した指、
貸してもらつていいですか」

//指先にキスします

「ちゅつ……。

こ、これは、早く治る、おまじないです。

唾をつけて治すより、

良いかなと思つて……。

あ、ああ、

今度はお鍋が吹きこぼれそう！」

「あつい！」

//一旦フェードアウト

★水の音

「正面を向く・目線下

「すみません……

私としたことが、

部長なのに不注意で

やけどしてしまいました」

「男性の方を向く

「いえいえ、きみは何も悪くないです。

え、今度は自分が何かできないかって？」

「そうですね……（やや上を見る）」

「男性の方を向く

「じゃあ、さつきみたいに唾をつけて
治してもらおうかなあ……。

なーんて……冗談です」

「代わりと言つてはなんですが……

やけどしたとき、

耳を触るじゃないですか。

あれ、耳たぶが冷たいから

効果があるみたいなんですけど」

「いま私の耳、

熱くなつてしまつてしているので、

きみの耳をお借りしてもいいですか？」

「もちろん、本気で言つてますよ？」

「……いいですか？」

「では、お言葉に甘えて。」

★左耳みみたぶの音

「ふふ……。」

「この触り心地、癖になりそうです」

「やけどの痛み、和らいできました。
ありがとうございます」

★盛り付ける音

//正面を向く・目線下

「では、最後の仕上げです。」

「お皿に、白玉とフルーツを
盛り付けていきましょう」

「これで……」

「じゃーん。フルーツ白玉、完成でーす。」

途中で色々ハプニングもありましたけど、

（男性の方を向く）

「無事に完成してよかったです！」

「お疲れさまでした」

「では……

お待ちかねの実食タイムに移りますね。

せつかくですから、

眺めのいい窓側の席に行きましょう。

ほらほら、きみも器を持って。

それでは移動します

//フェードアウト

トラック2 「家庭部部長の秘密の被服」

「正面近くで話します

「それでは試食会をはじめますね。
いただきます」

「あっ……。

★スプーンや食器の音
「んう。美味しいう。

自分で作るスイーツって
手間暇をかけた分、

普通に食べるより美味しいですねう」

「あっ……。

その指の怪我……

ちょっと食べにくそうですね？
……どうして身構えたんですね？」

「安心してください。

変なことは企んでないので！

ただ、私があーんつてして

食べさせてあげたいだけです」

「あっ、逃げないでくださいよ。

逃げたら追いかけちゃいますよ？

余計にくつついちやいますからねう。

……なんちやつて

（男性の左側に移動しながら）

では、失礼して隣に移動しますね」

★男子の隣に移動する音

//左側近くで話します

「白玉をすくつて、
お口まで運びますので、
あーん、つてしてくださいね」

★白玉を掬う音

「それじやあ。
スプーンで白玉をすくつて……。
はーい、あくん……」

★白玉を掬う音

「美味しいですか？
ではもうひとつ。
はーい、あくん……」

「ふふ。え？

「自分で食べさせてもらうのは不公平？

そうですかね。

怪我をしてるのはきみですし」

「え、私のやけども

痛そうじやないかって……。

いえいえ私は平気です。

もてなす側の私が
食べさせてもらうなんて、
きみに悪いですし……」

「それに、その、後輩の男の子に、
そ、そんなことしてもらうなんて、
さすがに恥ずかしく
なつてしまします……」

//左側近くで話します

「もちろん、きみに食べさせて
もらうのが嫌というわけではなくて、
む、むしろ嬉しい、ですけど……」

「あっ、じゃあ、こうしましよう。

お互に食べさせ合いつこするんです。

どうでしよう?

それならいいですよね」

★白玉を掬う音

「そ、それじゃあ……

あの、順番的に私ということで、
お言葉に甘えて……。

あ～ん……」

★白玉を掬う音

「もぐもぐ……。

ふふ……。

ちよつと緊張して、

味が分からなくなつてるかも……」

「でも美味しいです。

では、お返しにもう一度……。

はい、あ～ん」

★スプーンを置く音

「ふふ……。

同じ指を怪我して、

お互い食べさせあつてゐるつて、
変な感じですけど、私たち、
お揃いですね」

「さて。

料理の体験は今やつたので、
せつかくですし、
服飾の方も説明だけでも
していきましょうか」

「では試食会はちょっと中断しまして。
部屋の向こう側が被服制作の
スペースになっていますので、
見に行きましょう」

//フェードアウト

//フェードイン

★歩く音（数歩）

//正面近くで話します

「こちらがスペースです。

ちょうどコンテストが終わつたばかりで、
散らかっていてすみません。

本当ならもつと整理整頓
されているはずなんですけど……」

「私が作つていてる服ですか？
もちろん、ありますよ。
少し待つていてくださいね。
たしか……このあたりに……」

「あ、ありました。

この赤いドレスです。

胸につけたハートのクッショ�이가
포인트なんですよ。

え、売り物みたい、ですか？

ふふ……ありがとうございます」

//とぼけながら

「え……メイド服？

な、何の話ですか？

メイド服らしきものが

ケースからはみ出している……？」

「や、やですね」。

学校の部室に、

メイド服なんて置いてあるわけが……」

★服をしまいこむ音

「ふう……。

今のは、見なかつたことにして

くださいね。

いいですね」

「え……？」

メイド服をしまうときに

男性用のコスプレ衣装も見えた？」

//やや早口で

「なつ、ななんのことでしょうか？」

今度こそ本当に知りませんよ？」

女子だけの部活に、

メイド服ならまだしも、

アニメ『異世界最強俺様騎士団物語』の主人公ハルト様の衣装とか、

そんなもの……」

//やや沈黙あつて

「……見ました？」

「……見ちゃつたんですね？」

「今のも見なかつたことに……」

えつ、ハルト様のこと、

知つてるんですか？」

原作小説を読んでたつて、

ほ、ほんとですか！？

きやく、すごい！

こんなところで同志に会えるなんて！」

「そ、それで……」

「この衣装のことなのですが……」

もう言つてしまいますが、

私、主人公のハルト様が大好きなんです。

「そのファン活動といいますか、

私の場合は、

コスプレの衣装を作ることで、

ハルト様への想いを表現しているんです」

「でも、……がんばって作つたところで、
着てくれる人はいないんですけどね。
えへへ……」

「こんな趣味があるなんて、
いくらきみでも引いちやいますよね」

「え、本当ですか？」

受け入れてくれるんですか？
じや、じやあ……その……
もし、よかつたら、
……この衣装なんんですけど……
き、着てみてくれませんか！？」

「そうです、試着です。

私の見立てが間違つていなければ、
きみの身長とハルト様の身長の設定は
同じなんですよ。
だから絶対似合うと思います！
着替えて、その姿を
私に見せてくれませんか！」

★主人公着替え始める音

「きや、きやあつ！
(後ろを向く)
だからって、
急に着替え始めないでください！
私、後ろ向いていますから！」

★男子着替える布ずれの音

「後ろを向きながら話します

「あの……

衣装の着方で

分からぬところはありませんか？
もし分からぬ部分などありましたら
おっしゃってくださいね
あとウイッグもあるので
つけてみてください」

「そろそろ振り向いても
大丈夫でしょうか？
で、では、振り向きますね？
いきますね？
はあ……。
ついに、ハルト様との『対面……。
どきどきしますね……。
そーっ……。
(ゆっくりと正面を向きながら)」

//正面近く・嬉しそうに跳ねる感じで

「す……すごい！
すごいです！

ハルト様そつくりじやないですかー！
きやー！ なにこれ、かつこいい！
しゃ、写真撮つていでですか？」

★スマホのカメラで撮る音

「ありがとうございます！」

★スマホのカメラで撮る音
「ボ、ボーズください！」

「目線ください！」

★スマホのカメラで撮る音

// ここから少し、もじもじしながら

「あ、あの……！」

最後にこれだけ、
お願ひしてもいいですか？」

「その状態で、私のこと……
だ、抱きしめて
いただけないでしようか？」

「アニメ1期の最終話で
ヒロインと抱きしめあう
シーンがありますよね？
あのシーンみたいに
抱きしめてほしいんです」

//懇願

「一度でいいからハルト様の
包容力を味わってみたいんです！
ほんの少し気分を味わうだけで
いいので！」

「良いんですか？」

やつたあ……！」

じやあ、私も準備をしますので、
向こうを向いてもらつていいですか？」

//頭にはてなマークの男性

「え、着替えるんですよ」

「だつてきみはハルト様の衣装で、
それなのに私が学校の制服だつたら、
あの感動のシーンが
再現できないじゃないですか
だからさつきのメイド服に着替えます」

「あ、教室から出でいかなくとも
大丈夫ですよ。

後ろを向いていてもらえれば結構です。
でも振り向いたらダメですよ」

★後方から聞こえる着替える布ずれの音
●着替える際の吐息

//男性に背を向けた状態で

「はい、こつち向いて大丈夫ですよ。
あの……首の後ろのホック、
とめていただけないでしようか。
一人だと手が届かなくて……」

//男性に背を向け

「ひや……うふふ、くすぐつたい。
ん……。ふう……。
ありがとうございます。」

//正面を向きながら
「どうでしよう。

ヒロインのミミカちゃんの
メイド服ですよ。

似合つてますか？

うふふ、似合つてるつて
言つてもらえて嬉しいです……」

//少し恥ずかしそうに

「で、では、腕を左右に開いてください。
私がきみの胸に飛び込みます。

いきますよ……」

//抱き着く

「それ！」

右耳元で囁く

「ぎゅー。

ああ、ハルト様……」

「ぎゅー。

あつたかい……。

そして私はハルト様の胸に抱かれて
死ぬ……」

//抱き着きから離れて正面近く
「ふう……生き返りました。

ごめんなさい。

本当にごめんなさい。

わたしテンション上がつちゃつて……。

ご迷惑をおかけしちゃいました」

//正面近くで話します

「ふう……正気に戻ったのに、
身体がとっても熱い……。
ずっとドキドキしてて……」

「なにせ男性に抱きしめられるなんて、
初めての経験ですから……。

これじやまるで私が

体験入部してみたみたいですね。ふふ……」

「ええと……

さつき一緒に料理を作ったときも
そうでしたけど、
私のことこんなに気遣ってくれて……
私の願望を叶えるために
コスプレしてくれたり……」

「その、変なこと言つてたらごめんなさい。

私、部活関係なく、
きみと一緒にいればなあ、
つて思つちやつてます……」

「いきなり変ですよね。

でも、その……

//少し俯き小声で

「もしかしたら、きみのこと、好き、
になつちやつたかもしれないです。
なんて……」

//正面を向いてやや慌てながら

「あ、今のは、

聞き流してもらつていいですかね。

ま、まだ試食も残つてますし、
一度席に戻りましょうか。

ほらほら、行きますよ。

聞きたい事があるなら、

向こうで聞きますからね」

//フェードアウト

トラック3 「女の子は衣装で気持ちも変わることです」

「右側近くで話します

「ええと……

コスプレしたままだと座れないですよね。

コートは脱いじやつてください。

剣も外して大丈夫ですよ。

こちらでお預かりしますね」

「正面近くに移動しながら話します

「それで、提案なんんですけど……。

もしきみさえよければ、

この衣装のままで、

さつきみたいなこと、してみませんか?」

「何をするのかつて?

その……食べさせ合い、を……

したいな、と」

「あ、ごめんなさい。

やつぱり、

ちよつとわがままですよね……」

「ハルト様の衣装を

着てもらえただけでも充分なのに、

これ以上無理にお願いをするのは

よくないなって、

分かつてはいるのですが……」

「その……もつときみの

ハルト様を見ていたくて……」

「えつ……？」

い、いいんですか？

私のわがままに、

付き合つてくれるんですか？」

「わ、やつたあ。

ありがとうございます！

すつごく、すつごく嬉しいです！」

//椅子から立ち上がる

「あ……ちょっと待つててくださいね。
部室のドアに鍵をかけてきます。

べ、別に変なことを

するわけじや、ないですよ？

急に誰かが入つて

こないようにするだけです」

「さすがに学校でコスプレを見られるのは、
恥ずかしいじやないですか……。

それに、かっこいいきみの姿を、

自分以外の誰にも見せたくないなつて

……。

あ、いえ、何でもないです。

では行つてきますね～

（正面遠くへ移動しながら）「

★小走りする音（行き）

★鍵をかける音

★小走りする音（戻り）

//正面近くに移動しながら
「お待たせしました。

試食会の続き、はじめていきますね。
残っている白玉も、あと少しですね」

★スプーンで掬う音

「それでは……。
白玉をスプーンですくつて……。
はい。あーん……。」

「あ、ごめんなさい。
少しこぼれちゃいましたね。
ティッシュでふいてあげますね。
ふきふき……。
はい。きれいになりました」

★スプーンで掬う音

「では、交代して……お願いします。
はあ……ハルト様から
食べさせてもらえるなんて、
夢のようですね……ふふ。」

「あー……ん……。
んっ！（わざと）
いけない。
私のほっぺにも、
フルーツ白玉のお汁が
ついちゃいました……」

「え、ふいてくれるんですか？
ありがとうございます」

「ん……。」

「あの……？」

私の思い過ごしかもしれないんですけど、さつきから、

ずーっと目をそらしていますよね？

全然こっちを見てくれないですよね？

現に今も、私の方、

見てくれてないですし……」

「あっ……。

もしかして、

もう帰らなきやいけない時間ですか？

そうだつたらごめんなさい。

きみの予定も確認しないまま

付き合わせてしまいました……」

「え……。

そうじやないんですか？

単純に……目のやり場に困つてる？

私の服が原因で……？

「あ、あく……たしかに。

いま私、ミミカのメイド服を着てますね。

作つたのが自分なので、

全然気にしていませんでした」

「制服や普段着よりも、少し……

いえ、かなり丈が短いかも……。

胸の谷間とか、お尻とか……。

少し動くだけで

ばつちり見えちゃいそう……」

「あわわ、だから、あんまり見ないようにしてくれていたんですね……」

「きみはいい人ですね……。

で、でも、大丈夫です！

この衣装のことなら、

気にしないでください！

見られる覚悟がなければ
メイド服なんて着ていません」

「それに私だつて、

ハルト様の衣装を……。

それを着たきみのことを、

穴が開くほど見させていただきました」

「それどころか写真まで

撮つてるんですから……。

むしろ私のことも

穴があくほど見てもらわないと、

つり合いがとれません」

「……」

「は、はう……。

だ、だからといって、

そんなにじっくり見られると、

さすがに恥ずかしかつたり……」

「うう、そんなのダメですよね。、

ちゃんと見てほしいから、がんばります」

「こっちを向いてください、ハルト様……」

「は、はうつ。

見られるだけのはずが、思わず見つめ合ってしまいました。か、顔が熱い……」

「でもミミカはハルト様のことが大好きなので、見つめ合ってドキドキするのは当たり前のことですよね……」

★抱きつく際に布音

//立ち上がる

「そ、そうだ。
も、もういちど、
ぎゅーって抱きしめてもらえませんか？」

「外から押されてほしいんですけど……
じゃないとバラバラになってしまいそうで……」

//男性が立ち上がり接近してくる

「お、お願ひします……

きゅーつとしてください。

(抱き着く、右耳元に移動)

きゅー……」

//右耳元でささやきます

「ん……。 (甘い吐息)

んん……。 (甘い吐息) 」

「……。

はふう……。 (離れる) 」

//正面近くで話します

「あ、ありがとうございます……。

おかげで、収まつたみたいです。

ああ、でも……

ふ、普通にドキドキしてきて
しまいました……」

「あの……。

お、お願ひが、もう一つだけあるんです。

これは、その、

いきなりすぎるかもせんが……

「……キス……してもいいですか？」

//正面近く・目線下もじもじしながら
「や……やっぱり変ですよね。
あはは……。

さつき会つたばかりなのに……
いきなりキスなんて

//正面近く・男性の方を向いて
「で、でも今、したいなって思つたんです。
だつて、こんなにドキドキしたのは、
きみが初めてなんです
それに……」

「それに、こうして抱きしめられないと
伝わつてくるから……
きみも今、すつごく、
ドキドキしてくれてますよね？」

★胸の位置に耳を当てる際の布音

//正面間近、男性の胸に耳を当てるよう
にして顔を横に向け、小声で話す
「きみの胸に耳を当てていると、心臓の音、
どんどん早くなってるの聞こえます。
だから……その……
きみも私と同じ気持ちだつたら、
いいなつて……思つて……」

// 領く男性

//正面間近、やや男性を見上げながら小声で話します

「ほ、本当ですか？」
「いいんですか？」
「わあ……どうしよう……。
す、すごく、嬉しいです……。
きみも私と、同じこと、
思つてくれているなんて」

「あの……それでキスって、
どうすればいいでしよう？
ご、ごめんなさい。

実は一度も、

そういうことしたことがないで……。
え、きみもなんですか？」

「ふふ……じゃあ、キスも、
初めて同士なんですね。
嬉しいなあ……」

「それじゃあ……。
わ、私からしても、いいですか？
だつてほら、
言い出したのは私ですから……」

「それに私は先輩でもありますし、
やつぱり私からしたほうがいいかなと。
は、はじめてなので、
変なふうになつちやつたらごめんなさい」

「では……。

します、ね……

また心臓がドキドキしてきたので、
ぎゅーって抱きしめて

もらつていいですか？」

//抱き着きながらキス

「ん……

ちゅ……。

……ん……」

//正面間近・少し離れて小声で
「はあ……。

……し……しゃいました……。

は、恥ずかしくて、

きみの顔が見れません……」

「緊張とドキドキで、

ぽわぽわします……。

でも心が満たされるような、

幸せな気持ち……。

これがキスなんですね……」

「でも、ミミカのコスプレをして、
ハルト様とキスしたから……

じやないですよ？

今キスをしてみて、はつきりしました」

「きみだから、こんな気持ちになるんです。

私……きみのことが、

大好きになつちゃつたみたいですね。

わ……私の告白、受けてくれますか？」

// 頷く男性

「……よかつた……。

それじやあ、今から私たち、
恋人同士なんですね」

// 「好きだよ」と伝える男性

「……好き、だよ……？」

うつ……きゅ、急に恋人っぽくするのは
恥ずかしいですね。
きみも顔が真っ赤ですし……。
話し方は、しばらくこのままで
いかせてもらいますね……」

「で、でも恋人っぽいことは、

今すぐでもたくさんしたい、です……」

「たとえば、さつきの食べさせ合いを、
恋人っぽくするのはどうでしょう。
これもミミカとハルト様の
まねごとになるんですけど……。
まず私が白玉を食べべて……。
あむ……」

// 口に咥えている感じで。そんなにも「
も」させないで

「お口、開けてください
んく……
ちゅ……」

「ハ」、こんな感じで、
口移しで食べさせてあげるなんて
どうでしょう？

こ……恋人じゃないと、
できないことですよね？

「もちろん、

これで終わりじゃないですよ？

私のお口の中、見てください……」

「あ……

見えますか……

今ならシロップが絡んでいて、
私のお口、とっても甘いと思うんです」

「さつきは恋人になる前の

キスでしたけど……

恋人としてする初めてのキスを……

もつと深く、

味わってみるのはいかがですか？」

//キス

「ん……。

ちゅ……。

もつと、してください……。

ちゅぱ……ん……ちゅ……」

//ここから積極的にキス

「ちゅぱ……れろれろ……

れるる……ちゅぱ……

ん……(離れる)」

「こ」のキス……幸せな気持ちが、
ダイレクトに伝わってきます……。
最初のキスも優しくて好きだけど、
こっちのキスはもっと好きかも……」

「次のキスは下を絡める感じで
もう一度、してもいいですか……？
ん……。」

ちゅうう……

れる、れろれろ……れろれろ……。
れろんれろれろれろ……はあむ……
ちゅるる……」

「れえろ、れるれる……れろれろれろ……。
はあ……（離れる）」

「甘くて……とろとろ……
頭の中がふわっとして、
気持ちいいです……」

「きみも気持ちよさそうな顔、
しちやつてますね……
恋人にしかできないキス……
癖になりそうです……」

「これで終わりなんて、さみしいです……
もつと、いくつぱい、キスしてください」

●キス音（フェードアウト）

トラック4 「ふわふわもつちり これこそ家
庭部女子の包容力！」

●キス音、前のトラックに続いている感じで
//正面間近で小声で話します

「あ……あの……？」

ちよつと、待つてもらつていいですか。
その……とつても言いにくいのですが…」

「きみの……、

その……お、男の子の、
部分がですね……。

お、おつきくなつて、いますよね……？」

//)(?)と男性

「そ、それです。

ズボンの中で膨らんでいる……

私の太ももに当たつている、

それのことです……」

「すごく固くなつて、

張りつめていますよね……。

制服のズボン越しでも分かるくらい、

ぱんぱんで、

かちかち、です……」

★離れる際の布音

「正面間近、やや離れて
「あっ、そんな、慌てて離れなくとも、
大丈夫ですよ？」

「男の子がいろんな理由で
そうなつてしまふのは、
詳しくは分からないですけど、
知つてはいますので……！」

「それつて……その、苦しいもの、
なんですか？」

「正面間近で小声で話します
「と、突然、変なこと聞いてすみません。
そこがこうなつている時の男の子つて、
やつぱり窮屈なのかなつて」

「もし、そなうなら……そのお……
私が慰めてあげなくちやつて、
思つただけです
だつて、か、彼女に、
なつたんですし……」

//恥ずかしそうに話して

//正面間近で小声で

「い、意外そうにしないでください。

わ、私だつて、人並みには、

そういうことに興味はありますから！」

「経験はありませんが、知識として……

恋愛の本は読んだりして……

そうなつてている時は、

女の子がなぐさめて楽にして

あげるといいつて、

本に書いてあつたので……

今がその時なのかな、と

「え？ ……読む本が偏つていてる？

そ、そなんですか？」

「ん……？

なぐさめるつて、

具体的にどうするのか、ですか？

そ、その……ええと……」

//困つたように

「え、えつちなことを、する……とか。

えつ、もつと具体的に、ですか？

え、ええ……」

//恥ずかしそうに小声で話します

「その……、

お、お、おっぱいで、挟んであげる……
みたいな？」

//正面間近で小声で話します

「ふえ？ も、もつとおつきな声で、
聞こえるように言つて欲しい、ですか？」

「うう……」

「きみつて、

意外といじわるだつたんですね……。
先輩をあまり困らせるものでは
ありませんよ？

きみは私の彼氏さんですが、
さつきまでは後輩だつたんですからね。
もう……」

「それで……きみとしては……」

私にそういうこと、してほしいって、
思いますか？」

「そ……そなんですね……。
してほしいんですね」

「もう、仕方ありませんね。

いいですよ、私に全部任せてください♪
経験はないですが、
家庭部の先輩としても、
きみの彼女としても、
気持ちよくできるよう、がんばりますね」

★ 「んしょつ……と」のあとにズボン降
るす

／＼フェラの位置に移動しながら

「それでは……、

ズボンを下ろしちゃいますねう。
んしょ……つと」

「はわ……。

で、出てきました。

すゞ「おい……」

「これが……きみの……、

お、おちんぽさん……なんですね……。
ごくり。

あ、あの、初めて見るので、
観察、してもいいですか？」

「うわあ……。

こんな形なんですね。

棒の部分が勢いよく立ち上がりつて……

さきつぽが真っ赤に腫れて……

今にも破裂しそうなくらい膨らんでます」

「少し待つていてくださいね、

すぐになぐさめてあげますから」

★ 「準備しますね」のあとから脱ぎ始め
る

// フエラの位置で話します

「私も服を脱いで、準備しますね。
メイド服の胸の前を下げて……。
ブラを外して……」

「ふう……。

が、学校で、胸を露出するなんて……。
絶対にいけないことなのに、
すごく、ドキドキして、興奮しますね」

「私の、おっぱい……
ちゃんと見えますか？」

「その……どうでしよう?
大きさと柔らかさには、
それなりに自信がある、
つもりなのですが……。
気に入つてもらいましたか？」

「形も大きさも申し分ない?
そう言つていただけると、
嬉しいです……♪」

「それでは……きみのここを……
おっぱいで挟んで、楽にしてあげますね」

「わたしのおっぱいで……
きみのおちんぽさんを……えいつ。
えへへ……挟んじやいました♪」

//フェラの位置で話します

「ねえ、見てください。

きみのおちんぽさん、私のおっぱいで、
埋もれちゃいましたよ」

「最初は挟む力をほとんど入れずに、
やわらかあく、

おちんぽさんを包み込んで……
先輩のあまあまでふわふわの
包容力を味わってくださいね」

「おちんぽさんを、

おっぱいで包み込んで……
ふわふわ、ふわふわ……」

「左右から少しだけ押されて……
ふにふに……ふにふに……。

あつ……びくつて、

おっぱいの中で動きましたよ」

「わあ、すごいです。

おちんぽさんが、
おつきくなつたおかげで、
おっぱいの間から、
真つ赤な亀さんが顔を出して
くれましたよ」

「えへへ……びよこんつて頭を出して、
かわいいです……」

//フェラの位置で話します

「おっぱいで、

おちんぽさんのさきっぱが
出たり入ったりするように、
上下に動かしますね」

「左右から押されて……。

ん、しょ……つ、
ん、しょ……つ♪
ん、しょ……つ、
ん、しょ……つ♪
はあ……♪」

「ふふ、かなり固くなつてきたので、
少しだけ挟む力、強くしちゃいますね？」

「おっぱいの両側から、
ぎゅっと挟んで……
このまま上下に……♪
ん、しょ……つ、
ん、しょ……つ♪
ん、しょ……
つ、ん、しょ……つ♪」

「おっぱいの具合はいかがですか？
え？ おっぱいがふわふわすぎて、
包まれているだけで全部が気持ちいい？」

「それなら私の大きなおっぱいで、
おちんぽさんを
ぜーんぶ包み込んであげますね」

//フェラの位置で話します

「ふわふわのおっぱいで、
ぎゅうううううう……つ。

優しく、あまあく、ぎゅうううううう……つ。

このまま上下に動かして、
ん、しょ……ん、しょ……♪
ん、しょ……ん、しょ……♪
あ……」

「ふにふに甘々な刺激で、おちんぽさんから、
透明なお汁が出てきましたよ？」

「これって、気持ちよくなると
出てくるんですね。

これが出るということは、
もうすぐ、アレ、出そうですか？」

「出そう、なんですね。

でも、まだですよ」

「少しだけ辛抱して、

気持ちよさを溜めていつてください」

「私のもつちりおっぱいで、
たっくさんなでなでするので、
さつきよりも気持ちよく
なつてくださいね♪」

// ふえれあの位置で話します

「それでは、いきますよ。」

「んつしょ、んつしょ……」

「おちんぽさん、がんばれ、がんばれ♪」

「よいしょ、よいしょ……」

「おちんぽさん、がまん、がまん♪
んしょ、んしょ、

「がんばれ、がんばれ……おちんぽさん♪」

「うふふ……♪

「我慢してくれてるおかげで、
透明なお汁が、
さつきからとぶとぶうつて、
止まりませんね？
おもらししているみたいで、
すゞぐいやらしいです」

「うーん……」

「さすがに少しかわいそうなので、
さきつぽ、舐めとつてあげましょうね。
見ていてくださいね？」

「えつちな先輩の小さな舌先がく……、
きみのぱくぱく開いているおちんぽの
さきつぽに……、
ちゅつ。」

「ふふ、くつついちやいました。」

「舌の先端で、つんつん、つんつん」

//フェラの位置で話します

「んふう……。

少ししょっぱくて、

苦みもありますね……

でも……頭がぱわつとしちゃう味です」

「恥ずかしいけど、実は……

私のえつちな気持ちも

どんどん高まってきますよ？」

「おっぱいで挟みながら、

たくさんキス、しちゃいますね」

「きみの先走りでとろとろに濡れた

おっぱいで、

かつちかちの敏感おちんぽさんを、

ぎゅううううう……つと押されて」

//軽くフェラする

「揉みしだくように、

くにゅくにゅ、くにゅくにゅ……。

おっぱいからはみ出した

おちんぽさんのさきつぽを、

ちゅつちゅつ、れろれろ……

ちゅつちゅつ、れろれろ……。

ふああつ」

「できるだけ我慢、ですかね。
んつしょ、んつしょ、んつしょ♪」

「おちんぽさん、がんばれ、がんばれ♪
んつしょ、んつしょ、んつしょ♪
おちんぽさん、がまん、がまん♪
んしょ、んしょ……がんばれ、
がんばれ……おちんぽさん♪」

「もちもちふわふわのおっぱいで、
むぎゅう、むぎゅう、
むぎゅむぎゅうう……！」

「はわあ……おちんぽさん、
すつ（ぐ）く固くなつてる……つ。
負けないようにおっぱいで
締め付けちゃいますね……つ」

「根本から絞り上げるよう、
下から上に向かって、
ぎゅううううう……！
んつんつ、んつんつ、んつんつ♪
んつんつ、んつんつ、んつんつ♪」

「おっぱいで強く挟みながら、
小刻みに動かして、
さきつぽ責めしちゃいます」

「すばめた唇で、

辛そうにしているおちんぽさんのさきつぽを、

ちゆう、ちゆうぶつぶつ

ちゅつ、ちゅつ、ちゅ

「おちんぽさんなでなで、

ラストスパートです」

「それ。

んつんつ、んつんつ、んつんつ♪
んつんつ、んつんつ、んつんつ♪
もう本当にイキそう、なんですね？
分かりました。

最後まで気持ちよくなる
お手伝いしてあげますね

お手伝いしてあげますね」

＼＼正面間近小声で話します

「おちんぽさんを、

これ以上ないくらい、
ぎゅううううつ、來

「上下に、激しく動かして……！」

んつんつ、んつんつ、んつんつ♪

それつ、それつ、それつ……！」

「我慢ですよ。もう少しだけ、我慢して。
のぼりつめるまで、我慢して。

んつんつ、んつんつ、んつんつ♪

「えい、えい、えい……つ！」

私の声に合わせて、おっぱいの中で
気持ちよく出しちゃってくださいね」

「おちんぽさん、イッて……。

おちんぽさん、イッて……。

おちんぽさん、イケつ。イケつ。

イケつ……！」

//射精

「……ん♪

はわあ……すごいです♪

おっぱいの中で、どぴゅどぴゅって……。

爆発しちゃつたみたいに、
真っ白に塗られてしまいました」

「ふふ……。

我慢していっぱい溜め込んだおかげで、
匂いも濃くて、とつてもネバネバです」

「んぐ、

はふ……、すぐく、えっちな味です……。
これ、くせになっちゃいそうです」

//フェラの位置で話します

「あ……。

えつと……。その……。

またまた私、最後の方とか、調子に乗つてしまつたかもしません……」

「男の子の部分が膨らんで辛かつたのに、たくさん我慢させちゃつて、

「ごめんなさい」

「それでも私のお願ひを聞いてくれて、嬉しかつたです。

きみのこと、

またまた好きになつちゃいました。
ありがとうございます」

//立ち上がる、正面間近で小声で
「あの……肝心のきみは、

気持ちはよくなつてくれましたか？」

//気持ちはよかつたと答える男性

「そ、それは良かつたです。

もし少し疲れちゃつたら、
休んでくださいね？」

「でもまだまだ元気があるなら……

その……。

もう少しだけ、

お願いしたいことがあるんです」

「その……

私、えっちな気持ちが
どんどん高まって……。
き、きみがよかつたら、
もつと、もつとたくさんいろんな」と、
してみたいな……」

「なんて……（右耳元に移動しながら）」

「恋人しかできないことの続き、
（）」でしてもらえますか？」

//フェードアウト

トラック5. 「ふわとろ私を召し上がるれ♪」

//正面間近・抱き着く

「ん……っ。

うふふ……」

「きみの方から、
私のことをぎゅってしてくれるなんて、
安心させようとしてくれてるんですね」

「ふふ……とっても嬉しいです♪
ではお返しに、私からも、
ぎゅ～つしてあげますね？」

「わわわわわわわ♪」

「ふふっ。

キスも、してくれるんですか……?
ん……ちゅっ、ちゅうう……♪
ちゅっ、ちゅう……ちゅっ、ちゅっ……
ちゅっ……ちゅううう♪」

「ふふっ♪

抱き合ってキスするの、私、
かなり好きかもしれないです」

「きみのおかげで、

緊張もほぐれましたね」

「それに、その……

きみのあそこも、もう準備万端という
感じで大きくなっていますね
もつと気持ちいいことしてみたくて、
我慢できないって
感じになつてますよ……？」

★机の上に乗る音
★服を脱ぐ音

「正面近くに移動して話します
「それじやあ、ちょっとお行儀が
悪いですけど、
まずは私が机の上に乗つて……。
私も、服を脱ぎますね」

「え、近くで、見せてほしい？

いえいえいえ。

その、ココは、
人に見せるものではないというか……、
あはは……」

「あく、でも、きみのはしつかり
見せてもらつたのに、

私が断つたら不公平ですよね……」

「ううん……。

い、いいんですけど……あんまり見ないで
くださいね！ 約束ですよ？」

「じゃあ膝を立てて、少しだけ、
足を開きますね……。
見てもいいんですけど、本当に、
少しだけですよ？」

「では……ど、どうぞ……。
はう……。
ん……。

は……恥ずかしい……。
ひやつ。そ、そんなに顔を
近づけなくともいいのに……」「

「い、息がかかっていますよ……。
え？ 濡れてる？
ぬ、濡れてなんていません……つ」

「き、きれい？

あ、ありがとうございます……。

う……」

「は……はい！

終わりです、恥ずかしいから、
終わりです！

感想は言わなくていいですかね」

★机の上に寝そべる音

「それで……、

どんな体勢でしてみたいとか、

希望はありますか？」

「私ですか？ そうですね……。

お互い、はじめて同士ですから、

最初は正常位を試してみましょ……か」

「私の方が机の上に寝そべりますね。
きみもこっちに来てください……」

マイク移動、壁際

「こもりが寝そべり、男性が覆いかぶさ
る

「わ、男の子の体って、大きいですね……

覆いかぶさられると、迫力、ありますね」

「えへへ……今から、はじめて、
しちゃうんですね♪」

「ええと、そうだ……お願いがあるんです。

今日は、ゴムはしないで
ほしいんです……」

「一生に一度しかないはじめてなので、
きみのこと、直接、感じたいです……」

「あつ……。

きみのおちんぽさん、

今、元気に跳ねましたね？

ふふ……生で挿入できるからですか？

嬉しそう……」

「そろそろ、はじめます？

きみのおちんぽさんの先っぽと、

私のおまんこの入り口を

ぴつたりくっつけて……」

「そ、そのまま前に進むように、
入れてみて、ください……」

「私は大丈夫ですから、遠慮せずに。
いっぱいおまんこのナカを使って、
なでなでしてあげますから……。
何も考えずに、
私で気持ちよくなつてくださいね♪」

//挿入

「んつ……ああつ！ ふあああああつ……！

は、入つてきた……つ！

ああつ……すごい……

入つてきてる……つ♪」

「きみのおちんぽさん……

私のおまんこに、深く、

入つてきちゃいましたあ……つ。

あふうつ……！」

「だ……大丈夫ですよ。

はじめてだけど、

あまり痛くないみたいですね。

きっと、きみと私の相性が
ばつちりだからですね……つ♪

えへへ……」

「んっ、ああっ……い、いいですよ……。

おちんぽさん、

もっと動かしてください……つ。

私のおまんこで、よしよしつて
受け入れてあげますからね……つ♪

//ゆっくり挿出入されながら

「す、すごい……つ。

大きい……あっ、あああ……つ、
あふ……つ！」

「えへへ……。

きみがゆっくり動いてくれてるから、
おちんぽさんの形も
しつかり分かって……」

「あはあ、はあ、はあっ……
とつても嬉しいです……つ♪」

「きみのおちんぽさんが

喜んでくれていると思うと……、
私のおまんこ、きゅんきゅんして、
とつても幸せな気持ちになつちやいました♪」

//ゆっくり挿出入されながら

「こんなのされたら、きみのこと、もつとも
つと好きになっちゃいますよお……」

「おちんぽさんがおまんこの中で動くたび、
私の子宮、きゅんきゅんして、
びくびくって気持ちよく
なっちゃってます……♪」

「んっ、あっ、ふああっ！

あっ、はあっ、んっ、あああっ！
ダメ……こんなの気持ちよすぎて、
ほんとにダメ、ですう……」

「私の方が先輩なのに、
きみのおちんぽさんを
気持ちよくしてあげなくちゃ
いけない立場なのに……、
ああっ！ ふああっ！
はああ……っ！」

「私のおまんこで、おちんぽさん
なでなでして、
たくさん気持ちよく
なつてほしいのに……、
ああっ！ んあっ！
あっ、はああ……っ！」

「きみの肩に手を回して、
ぎゅううつて抱きついて……、
もつと、きみに気持ちよく
なつてもらうんですからね……」

//挿出入、停止

//抱き着いて左耳元で囁きます

「……はむつ！んちゅ……」

ちゅつ、ちゅつ、ん、れろれろれろ……」

「えへへ、どうですか……？」

お耳舐め、気持ちいいですか？」

//ゆつくり挿出入されながら

//耳舐めしながら

「んつ……ちゅつ、ちゅつ、ちゅう……♪

おちんぽさんつ、ちゅう、ちゅつ、

ちゅつ……

お射精、がんばりましょうね……♪」

「ちゅつ、ちゅぱつ、

んちゅ……ちゅつ、はあ。

私のおまんこいじめてくれる、

おちんぽさん、大好きです……つ

「んちゅ……ちゅつ、ちゅう、ちゅう……

好き、好き、好きい……つ

んちゅ……ちゅつ、れろれろ……」

「おちんぽさん、私のおまんこに、

気持ちよく中出ししてくださいね……♪

はむ……はあむ、ちゅるつ、

ちゅるるるるつ、んちゅ……」

「ちゅつ、ちゅうう……っ。

きみのおちんぽさん、

すごく熱くなつてきましたよ……っ」

「んちゅつ、ちゅるる……

ちゅつ、ちゅうう……っ、

おちんぽさん、イキそうですか……？

もう、出ちやいそうですか？」

「それじやあ……、

私が合図をしますから、

合わせてお射精してくださいね♪」

「きみが気持ちよくお射精できるように、お

耳ぺろぺろしてて

あげますからね……♪」

「ちゅつ、ちゅるる……ちゅつ、ちゅぶぶつ、

とろとろおまんこの中に……

白いのいっぱい、

出してくださいね……♪」

「んちゅつ、ちゅつ、ちゅうう……っ！

ん……

限界ですか？

もうイッちやいますか？

ちゅつ、ちゅつ、ちゅうつ……」

「ちゅつ、ちゅうう……つ♪
ちゅつ、ちゅつ、ちゅつ……♪
ふふ、よくがんばりました。
それでは、イツてくださいね♪
はい、どうぞ♪」

//射精

「……んつ！ん……つ！（射精）
んん……つ♪」

「はああつ……おまんこに、
どくんどくんつて、きみのお精子、
送られて来ていますう……」

「あ……あつ、はあ、あ……つ
私のおまんこも……
すつゞく気持ちよく
されてしまっています……」

「きみのかつこいいおちんぽきんに
ぴゅつぴゅされて、私……
イツちやいました……♪」

「はあ……あつ、はあ……つ♪
はああ……
とつても、気持ち、
よかつたですう……♪」

(耳から離れる)

//正面間近で話します

「私のおまんこ、どうでしたか？
ちゃんときみを気持ちよく、
できていましたか……？」

//頷く男性

「そ、そ、うなんですね。よかつたあ……♪」

「い、いっぱい動いて、
疲れてしましましたよね？
このまま抱きしめて、
頭をよしよしつて、なでてあげますね」

「ゆつくり体を休めて、
落ち着かせてください。
よしよし……よしよし……。
ふふ♪ なでなで、なでなで……」

「あ、あれ……？」

おちんぽきん……
全然落ち着かないですね……？
むしろちょっと大きくなつたような……」

「え……？」

まだ足りない、ですか？
ご、ごめんなさい。
きみが満足できなかつたのに
気づかなかつたみたいですね……」

「え、違うんですか？」

私のことをもつと
気持ちよくさせたくて、
こうなつてる、ですか？」

「はうう……。

「ほ、本当ですか？ そんなの、嬉しくて
泣きそうになつちやいますよ……」

「ふふ……私だつて、きみのこと、
もつともつと好きですからね……！

それじや、もう一度、

おまんこに入れてください……」

「ん……はふう……。

入り口を広げて……

おちんぽさん、入つてきました……。

温かいです……嬉しい……」

「えへへ……私は大丈夫なので、
きみが満足できるまで、
好きに使つてくださいね♪」

//激しく突かれながら

「んつ……、あつ、
はあああああああ……つ！
さ、さつきより、
いきなり激しいです……つ
あつ、はあああああ……つ！」

//激しく突かれながら

「おちんぽさん、硬くて、
おまんこの奥まで、届いて……っ。
すゞいっ、おまんこ、
気持ちよすぎます……っ！」

「んっ、はあっ、ああっ、
ああああ……っ！
はあ、はあ、ああっ、んあっ、
はああああ……っ！」

「も、もつと、顔見せてほしいです。
体をぴったりくつつけてください……
きみのこと好きな気持ち、
もつと伝えたいです……」

//右耳元で囁きます

「好きっ……きみのこと、好きっ……
抱きしめられるのも、
キスするのも、好き…
きみがしてくれること、全部、
好きなんです……っ」

「んっ、あ……はあ……っ！
あっ、はっ、はああ……っ！
おまんこ、
とつても気持ちいいです……っ
きみのこと大好きだから……
おまんこ、すゞく喜んでいます……っ」

//激しく突かれながら

「んっ……ああっ、はあ、ああっ、
んあっ、はあああ……っ！」

「えへへ……

もつともつと、
きみに気持ちよくなつてほしいですっ
きみが気持ちよさそうだと、
私も幸せな気持ちになるんです……っ」

「えへへ……好きです……♪

ん、ちゅ……ちゅつ、ちゅつ……
好きい……ちゅつ、れろれろ……
好き、好きい♪

「だ、だめ……

きみのおちんぽさん気持ちよすぎで、
私、我慢できなくなりそうです……っ
おまんこ、もうイキそう……
なんですっ……！」

「あ……でも、きみのおちんぽさんも、
今、びくびくつてしてきましたね……♪

お射精、できそですか……？

二回目のびゅつぴゅ、

私のおまんこにしてくれますか……？」

「お、お願ひしますっ……

いっぽい中出ししてください……♪

「もつといっぽいお耳にキスしますから、

私の合図でまた

気持ちよく出してくださいね……♪

//激しく突かれながら

//右耳舐め

「んつ……ちゅつ、ちゅうう……
ちゅつ、ちゅつ……
んちゅつ、ちゅうつ、ちゅつ、ちゅつ……

……ちゅつ♪」

//正面に戻つて

「ん……。はあ、あつ……、
あつ、あつ、気持ちいいです……つ。
んつ、ああつ、はああ……つ！」

「お、お射精、しそうですか？」

おちんぽさん、

ぴゅつぴゅしちゃいそうですか?
えへへ、いいですよ……つ、
いつでも出してくださいつ♪」

「んつ、ああつ、んああ……つ、
い……行きますよ……?
はーいっ……♪」

//射精

「……あつ！（射精）あ……つ！
あ……つ、は、あ……つ。

で、出てる……
中にいっぱい、出てるう……」

「すゞい……

2回目とは思えないくらい、たつくさん。
おまんこから、
白いの溢れちゃっています……」

//抱き着いて左耳元で囁く

「えへへ……♪

おまんこの中、とつても熱いです……」

「はあ……はあ……

うふふ。おちんぽさん、
よくがんばりましたね。
元気にぴゅつぴゅできて、

えらいえらい、です……♪

//正面に戻つて小声で

「ん……ちゅつ、ちゅう……ちゅ……ちゅつ、
ちゅつ……ちゅつ、ぱ……♪

は、あ……♪

私も、とつても
気持ちよかつたです……♪」

「うふふ。

私のこと、
たくさん気持ちよくしてくれて……
ありがとうございます……♪」

「してる間ずっと、

私のことを好きだつていう気持ちが
伝わってきて……
とつても嬉しかったです♪」

「そろそろ、遅い時間になつてきましたね。
きみもいっぱい動いて、疲れましたよね。

このまま最終下校の時間まで、
ゆつたりしていきますか？」

//抱き着いて右耳元で囁く

「こ）のまま眠つてしまつても大丈夫ですよ。

時間になつたら、

私が起こしてあげますから。

安心して眠つてください♪

「あ……そうだ。

起きたら、二人で一緒に帰りませんか？
手をつないで、一緒に下校するの、

夢だつたんです。

ふふつ。約束、ですからね」

//フェードアウト